

コハクチョウ幼鳥群の観察

渡辺朝一

310-0032 水戸市元山町2-2-33パークハイツK202

コハクチョウ *Cygnus columbianus* は、家族の絆が強いことでよく知られている。

筆者が、冬期の越後平野で行なった調査(渡辺 2006)では、コハクチョウは採食場所である稲刈り後の水田に小群で分散して採食していたが、群れにおいて、成鳥は2羽以上は必ず見られ、また幼鳥のみの群れも観察されなかった。これは、越後平野では、冬期の水田で採食するコハクチョウの群れは、家族群を基本としているためであると考えられた。

また、日本海側の多くの地域では、本種の越冬個体群は、越後平野と同様に池沼を塙とし、稲刈り後の水田で採食するようである。これらの群れを撮影した単行本や雑誌に掲載された写真で見ると、本種は越後平野以外の各地においても、やはり越後平野同様の、家族群を基本とした群れで採食するものようである。

筆者は、関東平野の水田において、コハクチョウの幼鳥のみで構成された採食群を観察した。これは、国内ではかなり例外的なことと考えられるため報告する。

コハクチョウの幼鳥群を観察したのは、2001年3月4日、場所は茨城県水海道市(現在は常総市)伊右衛門新田町である(図1)。飯沼川の両岸に広がる広大な水田地帯の一角の1枚の水田に、コハクチョウの幼鳥のみ11羽が、イネ *Oryza sativa* の切り株から萌芽成長し結実した再生穂を嘴でしごきとるようにして採食していた。

この場所は、コハクチョウの集団越冬地である菅生沼から、北北東に約6kmの距離にある。このコハクチョウの幼鳥群は、菅生沼から飛来したものと考えられる。菅生沼では人の給餌やマコモ *Zizania latifolia* の地下茎が本種の食物となっている(渡辺 2002)。菅生沼の給餌場は狭いため、体力で劣るコハクチョウの幼鳥は十分に採食できなかった可能性が考えられる。また、マコモの地下茎は泥の中にあるため、コハクチョウは嘴を使って泥を掘らなければ採食することができない。やはり、マコモの地下茎も、コハクチョウが十分に採食するには、経験や体力が必要な食物である可能性があり、経験や体力で劣るコハクチョウの幼鳥は、菅生沼で十分に採食できていなかったのかもしれない。

そのため、十分に採食できなかったコハクチョウの幼鳥が、菅生沼以外に食物を求め、水田地帯に飛来した可能性がある。観察した水田は、再生稈が成長していたため

枯れ草の色がよく目立ち、コハクチョウがその存在を発見しやすかったのかもしれない。

過去において、菅生沼のコハクチョウの採食個体数割合を一日中観察した際(渡辺2002)には、コハクチョウは一日中沼内にとどまり、沼の外に飛去するような行動は一切観察されなかった。今回の観察した幼鳥群が、実際に菅生沼から飛来した個体であるのか、今後あらためて詳しく観察する必要がある。

引用文献

渡辺朝一. 2002. 関東地方の池沼におけるコハクチョウの採食個体割合の経時変化.

日本の白鳥 (26):2-9.

渡辺朝一. 2006. 冬季の越後平野水田におけるコハクチョウの群れサイズと分布. 新潟

生物教育研究会誌 41 ; 7-12.